華之姿



うつろふの世乃昔を花の名絶せ人目も
やとともる夜半を乃——雲乃星九年
頼みも水もなくうたゝ
くみ侘つゝ手ごとの酒ぞ掬
むの中みなれにも衆めを
さゝ礼いてやけ昔紙を継ぎ

元三松竹梅



春もやゝ氣色ばむ梅





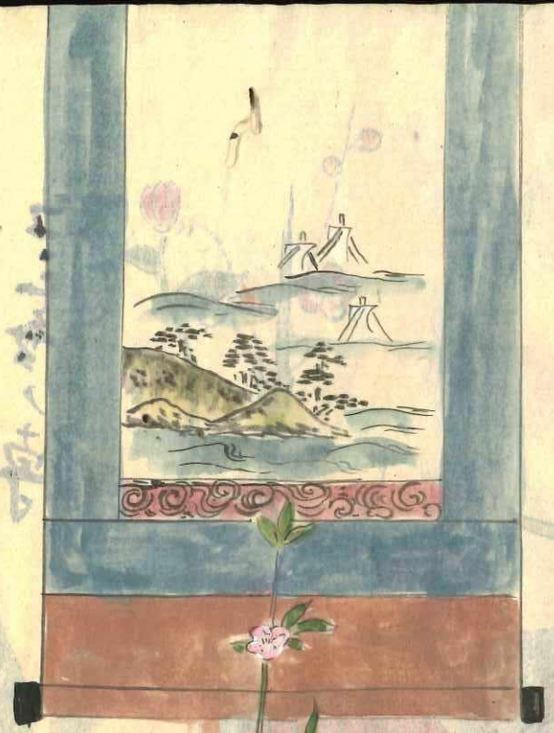
福壽州

漢名報春菊

元日為民云

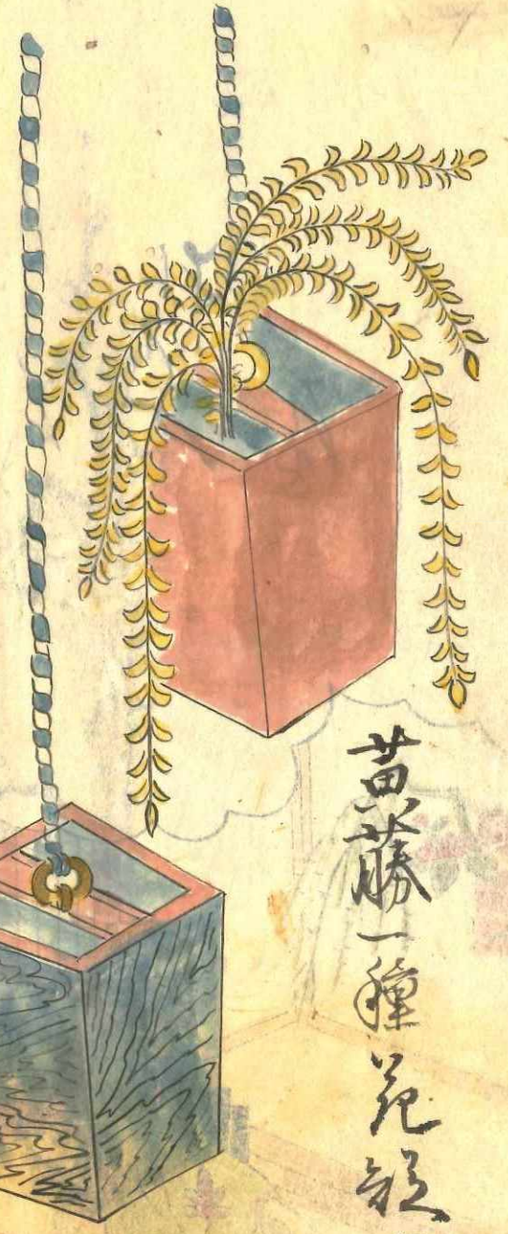






上巳之初





苗藤一種花紅白

日照梅花色愛好

雨晴


揚子の水揚も
新たに難可耶
黒丸
コミ竹ノ傳
絶結垂花
挿込雛之花
櫻瓦山葉花
手桶松


竹芦ニテックク
馬蘭
海石榴

水ノ末別

花笠サアリ



キウユイバイ

九英梅

和名カラムメ



トウコウ

筒菩高

春菊

サウマキク

掛花 艸十り

山慈姑 ヤンシュ
和名アマナ

蓮香 レンキャウ
和名イタチ艸

紫胡蝶
和名八

一八や
尋有

揚羽



熊谷草

赤布袋草

一莖一花二葉

敦盛艸

漢名未考



亀甲

扇仙花

初夏小株ものみ

初又

和セクレン紫

生庭コフシ白

木筆







宗誠

蛇蝶花

牡丹

和

玉蘭花　和ヨシヤマレンケ

江蘭仲和ツクモコトリ





紫蘭

十万家鳥ほうや

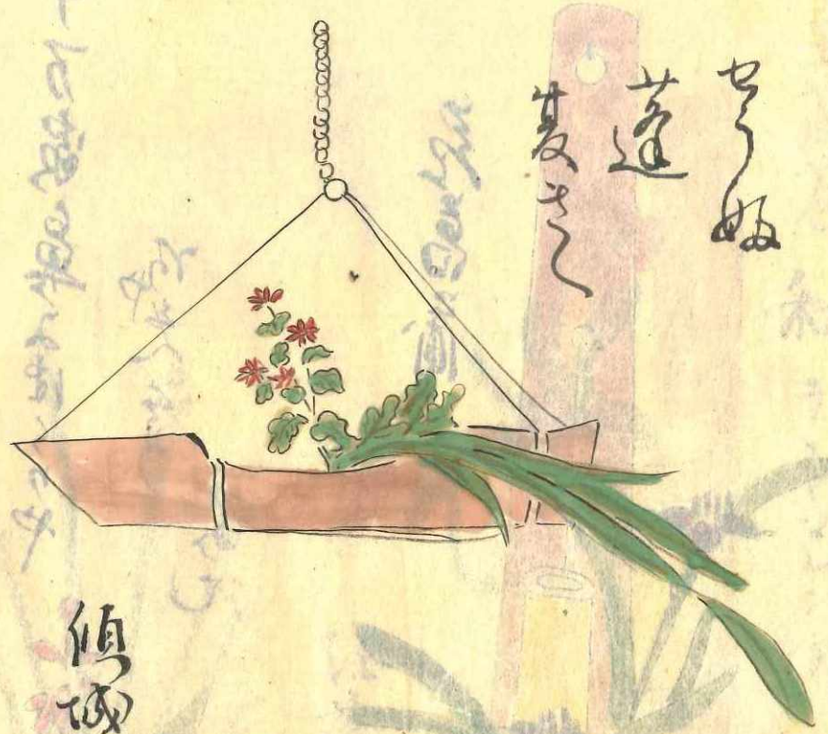




君高蘭



和コテマリ







牡丹

花器鸚首



石竹盆花

石竹直花





角樹 コモクカン

王蜀葵 キホウシ



カンサイ
蕪菜
ハナサシ
山菜



樟牙菜
イナツヽウサイ
一名竹菊紫朝ニ
和ホタルグサ

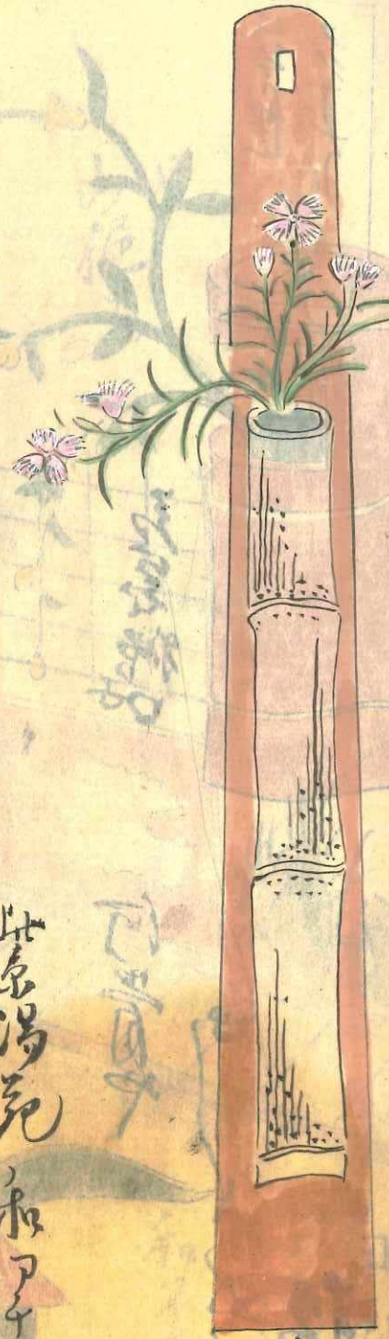


射干や
雪のそら
ゑゝ
ゑゝ



三ツ又ニ九ツ
二角菖
水菊ゑゝ
二角州ノ
別雅
ヤガテ尾トモ









山東滝や
翁
好古

月の秋
希因

石竹や幾年
ふるほ森のつゆ
浄六

紫陽花
和アヂサイ

花菖蒲
和アヤメ

葉ニ
和名ナルユリ
アヤトコロ

草ノ
駐イ

早藕 本艸 杜蒙
和名カタクリ カタコ
和百合 コユタイコリ
ゴンヘリロコ 一茎一花一根
二葉出生ル故一花四葉
可許







荷包牡丹

和名花曼珠

藤牡丹





一名風車 桂蓮

上ヶ州下ヶ本生ノ有

ヤホウス

紫花

若如紙久其ノ末ヲ用ユ

阿胄

龜甲艸

鼓子花

海山丹　和ハコネウツキ
一名ホトトギス
錦帯草





花笠草

二重切

交竹桃
一名羊角紅



大谷の玉伽羅
蒲萱花



ハナショウブ
蒲萱カラ
雨久花　水ナキ
水アフヒ

金銀花
一名忍冬
和スイカラ











地竹
和萍

ひそう

燕子花

菖蒲河右ニ有

草藤

蔓ナシバヤマ

百合

一名春牟

宿り好有

主ら名萬年山有

海棠花

和トベう

白

紫





白粉蕗豆トウマメ

蛾眉豆和イテンマメ

フヒマメ



下ゐ方

花ても

海棠

繍毬紅

一名蕎菓



もえ海棠

千日紅

和ガン心

唐桃

翌丑ノ年出て
斑入の蕊あり

石台の花



涼代巾

金木蘭
和ハマおう
ムクチ々種類ナラン



透(スカシ)ユリ



カリミ花

菖 あやめ

何類の一門

唐
花菖蒲

東京



蓮の葉
飯銅（ハウ）



芙蓉蓮
一名芙蕖（キヨ）

あさ日やその日のもの朝顔



秋風

木槿



槿の細かけて
黄の手稗ふ
希周

山萩



夜ノ花ハ（カ）ヲケアラク生ヘシ
芳花ハアシタ

細口
ヒタ枝梗

遅咲なり
吟行
秋の月

蓮

梅金



夏きく

夜さくや
おきはをとらぬ
露ばかり

素堂



金糸梅



うつぼ草

深山こアん



河芦

ヒヲフキ

桔梗

ワレモカウ

地楡

小菊

射干

芝桜

勢紅納花

ヒマワリ
延陽竹



牛蒡もよもの
こゑや風車

名月や幾
筋の
ひまわり



萩
桔梗
女郎花
仙人掌
菊

中秋ヨリ
菩提童ニ立生ル

重九

家の思ひ草

見れ





狩野信要筆



クスヤ

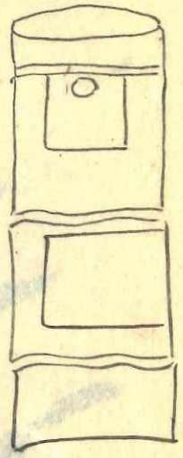


稗



水木椿
鶯や靏の
中六前の菊
五葉

二重切もなへ









水仙
金銀花

秋如

洞生茶ノ花

茶花や
根ヲ未焼
古の色

藤尺

寒梅

山茶花





一名曼陀羅樹



枝ぶり

名物の

仲生木

一位作生木



魚道私

一木瓜花ハ人ヲ千ヲ又心時ニ用ル私ニ忌ヲ



菊蘆

掛板



萱草
ワスレグサ



羽衣竹

柊
ヒイラギ

節分竹

葛ばら

萬年蘭

主人



若葉

地葉

キリ葉

流葉

寄カユイ

一千竹万木山里性ヲ不失容ニ可心得事

一二重切ハ上ヘ込ナシ主客ノ心得ニテ生ル

一掛花ヲ扨ハ行時モ込ナシ可知事

一扨物銅ノ瓶スヘタ行ニモカラス有リ二瓶ノ等吉ナル

一扨瓶掛ケル人其瓶ヘ何モ能リ生吉中社ヨリ書近

一モ客信ノ受心ル 一書院ハ洋大抵重瓶

一生花出性ヲ一ツ一秋ヲ手ウカ九花ヲ光吉

人ヲ花

掛ル八モ

蒼ニうち鋏の第

本ヲモ

掛

ウ也



閒情偶寄曰

椿ニ華ヲ六子瓶ヲ必冬中窺
其枝梗之有ニ温着ニ随ヒ
生ヘ自然合宜

同書曰

大部餅窓ニ渡ス井ニ過ル壮ニ窓ヲ小丼ニ
過大極文ヲ者ハ石可ニ過ル得ハ六七寸ニ
瓶鉢佳若ハ小則養ヒ充ル不能ク

瓶花譜曰

小瓶椿ハ宜ニ渡巧ニ不宜繁雑若
正椿一枝須撰枝柯奇ヲ右屈曲針鳥ノ有
欹椿二枝須ク高下合椿假者ニ一枝仮ニ
凡ソ三五者一或両枝彼ノ右白ニ先奏ス族像ヲ

萱史曰　忌俄ルヒ行列ニ忌以純束縛スルヲ

萱華譜曰　己心有環忌對成係楠祠ヤリ

萱史曰　鮮中楠苑止可一種西雅猶過多使

同　楠苑不ヲ多盤示ふて瘦不過二種

同　三好高似密如画華

同　華下不宜横香為苑之劍反

拉真ノ華国者折倍則香色数日不減若日高雨露晞折得者乗不全不鮮且一両日ヲ過ル者ヲ落矣

萱苑譜曰　四年之花九枝

同　株形勁枝向日向取巧猶草葦最難

楠面脱俗　脱俗名人為生画跡似難

梅譜曰　賣苑者必有爭先為高各物所未聞

枝最洛室中薫芬令折強名卑

梅幽瓊雅　大華楠苑須要二苑ヲ與萱楠ヲヨ

大華楠苑　令梢高ヲ一尺ノ

萱華譜曰　鉢假ヘ如二萱苑高サ一尺ノ

花出ル
六七寸ナラバ
乃佳
雅趣

二尺三四寸ナリ 紙ノ高サ
紙ノ八九寸ナル
忌ム
大ナル紙 易ク忌ム他
実

大意和意四首

天地の恵みこそ
草も花も木も
赤き
水陸の陣有
無
なるべし

心持ナル一首

業中能くても風雅なき人は
言の葉の
花道
学
なるべし



一花一葉

四花一葉

六花六葉

十文字といふりの枝葉ニ文鏡(かゝみ)ハ陰ハ指す枝前指枝
正面ハ鏡ニ向ふようにあるを花をハ陽ニすへし但しよ
裏陰葉ニ枝葉ニ用葉ニ流ニ残もの茎ニ入陽ニ陰ニ陽之
葉ニ入ても見所へ正面なし是をハ前ニ陽ニ切若(こけしや)有有
天井や枝ちへ指葉ニのさまるのハ左右れても伝ハ心得てせよ
時ならぬ花ハ旅人も陽ニ面し去れ共陽り也有り
花枝葉ニ立あるにハ陽ニあり又但出あり
又但ニ限りて四葉ニハ用るす有り葉ニを八重様よ 也も云ハ
若しかる物ます

侍童(じどう)ハ葉ニ有なり用ニ入並りよし
燕子花一花侍
仙柳居士吟
脇ところ有
節ハ張物
あやめ のき つぼく







雨水なり
赤花は桐入
赤井戸へ下並吉

七種二種の三種み限ちなし　秋ぎりまぎる移生地
かちくし淋しうきさうゆゑ淋しさ
空のおもひいひしれ　おもひ
（但し萩ばかり。せんこう。）

庵人のぬるをかて生ちもの
七草の二番み種をいそ
萱ちるや夜のもみぢ
掛物の絵にかれ　食欲
秋の海にかれ　板み生ち

墨跡や画人のおもひ
庭み花にかれ　花ぎみつもん
筆の花九枝十二首

草むすべて根を焼て
裏に焼て焼てし杉
後のも杉海を
の骨八其切にへ

秋ぎりまぎる移生地
淋しうきさうゆゑ淋しさ
おもひいひしれ
（但し萩ばかり。せんこう。）

庵人のぬるをかて生ちもの
七草の二番み種をいそ
萱ちるや夜のもみぢ
掛物の絵にかれ　食欲
秋の海にかれ　板み生ち

墨跡や画人のおもひ
庭み花にかれ　花ぎみつもん
筆の花九枝十二首

草むすべて根を焼て
裏に焼て焼てし杉
後のも杉海を
の骨八其切にへ

蓮の葉ふくとおもふそれおもてとうて
茅の花もろともつゆのおもかげ
秋風堂冬の篇（山戸月和尚）の追善の為に湯島
稽古堂にて句を題よとありければ
蓮葉もすでに稽古の中（七夕の句）
竹や葛紅葉ふくとそ見ゆむら
名月や雲入道の出ぬ内
宝暦六年四月廿五日秋風堂死去の
すいせんや弥生の庵のおもかげ
紅梅や床の間めかす枝のせん
梅林、床の間にすゑ物の
蕨林、床の間にすゑ物の能とおもふ
蕨林、床の間にすゑ物の能とおもふ
永日帰る雨の行くえ
蛍床の先生江戸に出る
蛍床の先生江戸に出る

糸の弦（ツル）巻の夢ごゝち古法ちゝめ連ゝさゝりゝねゝ振て引ゝと

新飛縄つゝれ縄ゝりゝ糸飛ゝ姫ゝ

むすみ大小眼り左甲連ゝそゝ地（キ）方ハゝこゝろゝ

兼飛のゝゝ素あゝおゝと初ゝ常ゝそゝしゝさゝゝゝゝゝゝ

定ゝゝや梅西のゝみゝれお常（つね）おかゝよゝ心ゝそゝ糸連

作の旨ゝそ用心有ゝゝゝゝゝ永り抜ゝ者と初連

行ゝの死ゝもゝそ氷ゝお硫黄汤塩入ゝ能ゝり

行乃切り旬春ゝよ

書作の時灰出ゝ布丹て拭ひ数日干ゝ

木芙蓉凌霄風仙死ゝ変ゝまゝ抜ゝ

（晴）もゝ利後ゝ実ゝ

床柱の新ゝ骨ゝ袋の

作旨ゝ口ゝ

南天ゝ庭ゝあれゝ

二ゝ封の掛ゝ

孫抔遣ゝ

南天ゝ実ゝ生ゝ

ゝ同木面ゝ枝ゝ

中掃ゝ

仙人ゝ牡丹ゝ

行旨同ゆうもあり　楊
弘氏之下自り蜂の
苑之外り受ゆきもの
已ゆ一汁もて七分
各のもさなお書
苑の教会すもの家
小梅ゆもて豆ふそも
書院乃庵ゆもて
ゆ一山庄ゆ
事院ゆもの小弁も弁也赤豆飯柳一事の苑之也
弁ハ中秋ゆり中春ゆ
葉汁り苑汁り
シンナウ木　山鳴　鬼茄　苑　つゝミ百合
ザクロ　杜若　萩　桔梗　女郎花　苑
鶴臥　百日紅　芍薬　苑　唐仲し　可忘

生華真行草ノ文

卓下のむ、き中ゟり生みそ入迄ゟ〳〵有の候ゟ
置筒ハ行ゟり主客客居七分ゟ枝み先枝振ゟ出ル
掛筒ゟ等ゟり前のしの縁へかゝ曲を浄ゟ
生て並〳〵むとゟふの数能文〳〵いつみと問て
落板ハ寸ゟる歩みこゝゟ九ゟと角ゟかゝ〳〵と
こゝ釘ゟ中の使用をゟ〳〵打ゟ右弘安ハ上ゟみ也
半人ゟゟ掛書釘ゟ〳〵文字ゟ余弛をせよ



遠州流

主真 一股

補佐 流如此云

客真 二股



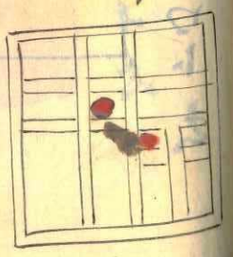
ナカシ ヒカヘヤセ 去

二股

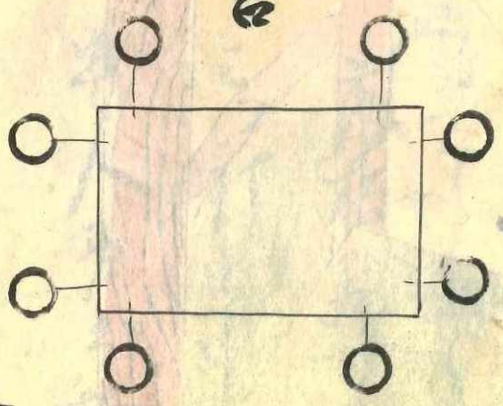
木賊 一字ニ

白丁花





吉

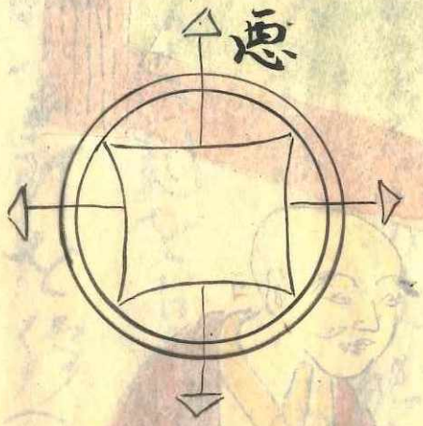


吉

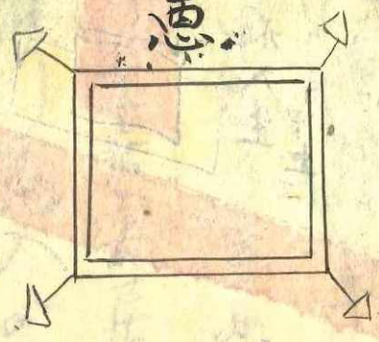


華之枝

悪



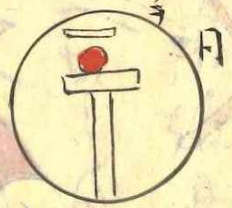
悪



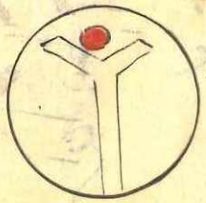




トリ井

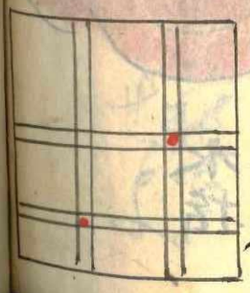


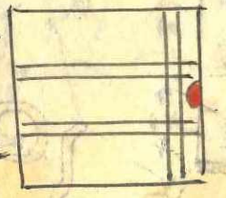
ニモク

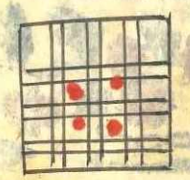


コク

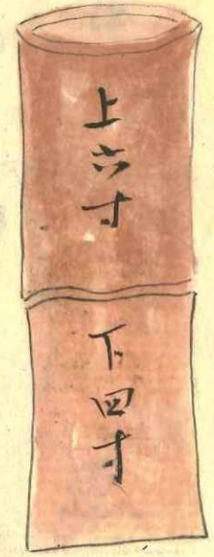








置官丈ケ八胴カヘシヤリ穴ヲ





両分形ニ又一寸ヲ切



長脚ト云

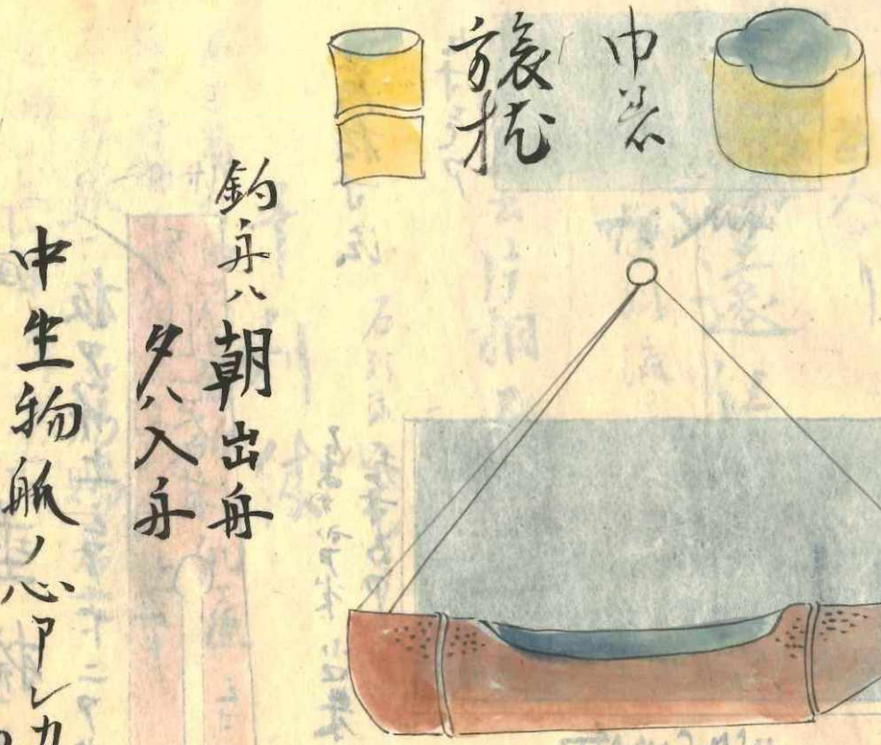


獅子口ト云



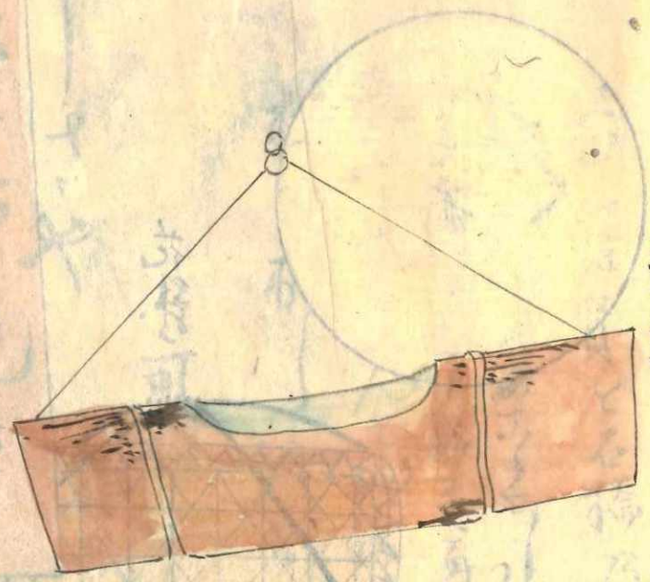
焼形或ハ春度ナリ 縄ヲ通シ

切込ハ二ノ二ナリ

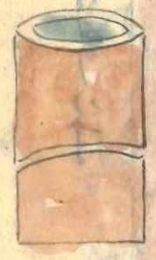


客ノ方ハ六寸ヲシテ下ルナリ

油留ト云



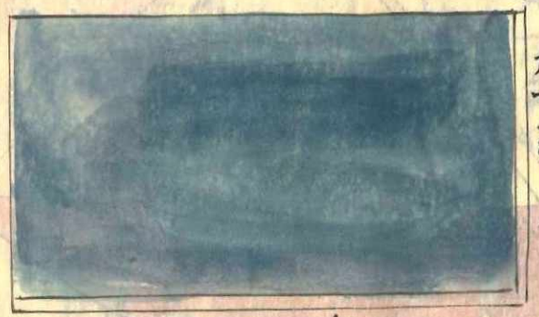
大黒切洞ト云

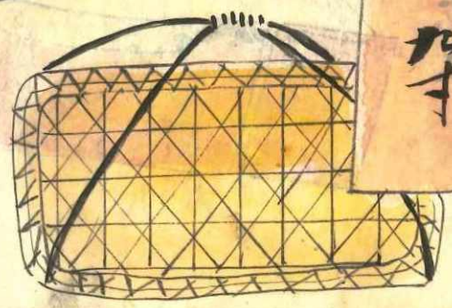


鉤ハ朝出舟
穴入舟

中生物舩ノ心アレカシ油リ通ルアリ







東山義政公

茶人十哲

世、摘遠別流　正保四丁亥年九

小堀遠江守政一

石別流　宗甫　画好

世、石別流云片桐石見守　同

貞昌　泉閣

石別流　松花子云

千利休

名宗易号抛筌斎初称田

氏不姓田中氏後改千氏仕

考信家二子　石斛　号居士

之稱　天正十八年没年七

茶道中興之祖ト云

送別

秋田山雁貫を石橋乃

遥近接行のさもうし

雲よとの空行を再会

乃約を定んと雖浅見

枝を利うし

可積

合瓜

涼しさや

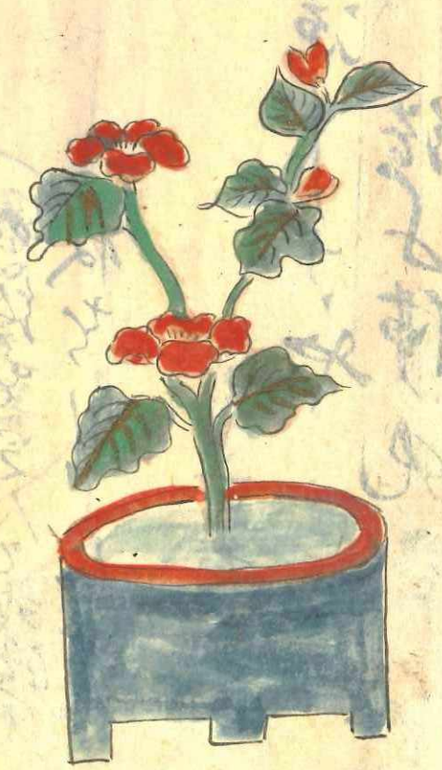
絵よ神も

乃見る気

掛筒ハ季節ニ
依リさまざま有之



置物ハ草木トモニ
おゐり生々ザマ
大一ゝ



根

如此十り



小ざゝ



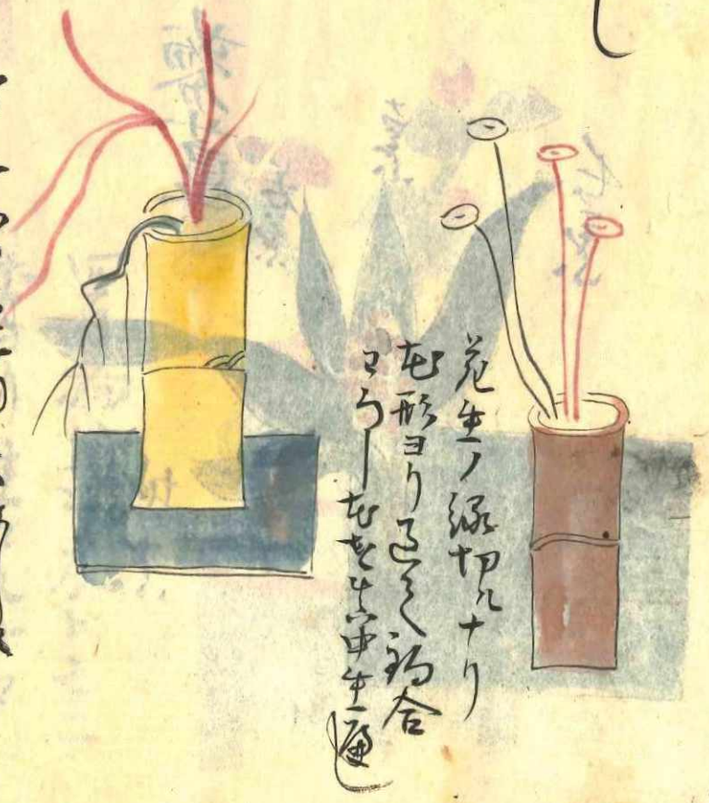
盤石



実花ハ十ニ月ヨリ実ヲツケヨ用ユ















花生ハ花ノ派ヲ延ベテ
枝ノ如クニ茎ノ
生ズルモノ



花ノ咲キ方ハ
花ノ
咲クヽアル

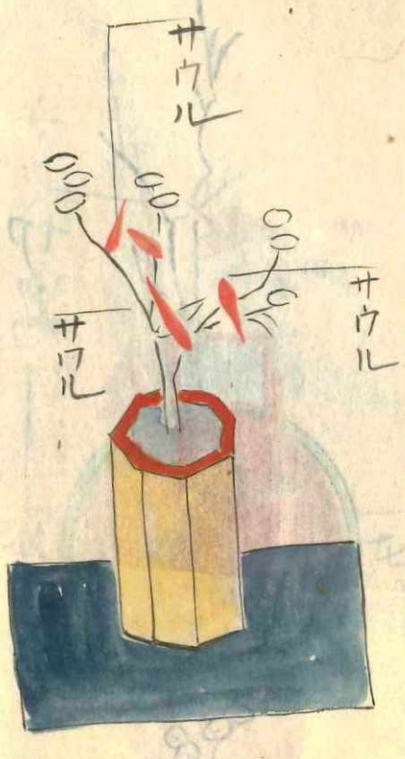


大ナル鉢ニ植ル時ハ一本ヲ
植ヘ又ハ二本ヲ
植ヘ又ハ三本ヲ植ヘ



花ノ咲キ終リテ
葉ノミ残リタル
時ハ葉ヲ
切リ去ル







角花ト云ヒテ
鳥ノ嘴ノ
如キ花ヲ
開ク



花ヲ垂レテ
咲クミ花ヲ
ツケ葉ハ
竹ノ如シ



花ハ葉ノミニテ
ヒロク
葉ハ
竹ノ如シ

カイ葉ヲ
ヨクヘル葉



葉ヲ摘ミ取リ又ハ
ノ中ヨリ木ノ有ル所ヲ
方ヨリ切込ミ一面ニ
根ノ入レ所ヲ作ル

切込



或書ニ曰ク斜ニ切ルト
アヤマリヲ生ジ
又切ル



葉ヲ取リ茎ヲ切



葉ヲ摘テ茎ヲ切

葉ヲ摘テ茎ヲ切



ニツニモ
ノヨウニ
ヨキ

昇水


山腰


守護石


不動石

守

三宮石

石二頭尾アリ
フセル石アリ
見立アリ


水


二神


一神

客

主人


祭傳


二神


二神

生業 古姫廿五箇条之事

一 花一束くる 一

一 郡村数 一

一 見ろりくる 一

一 亭古城さんぬの 一

小字丹ゐゆる板書くる













一花をめしく枝ぶそる一二ヶ条写ぶそる文

一童り姿ぶそる

一織ぶ迄ぶそる

一虫ヶ竜り花ぶそる

一陰陽之事

一向ひ花ぶそる

一諸抱へそる

一二ヶ星花ぶそる



一 はうへりそう

一 色切紙切事

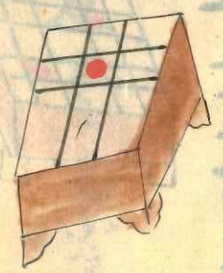
一 花芯の雌雄を
定規の備（花芯分）

一 糸すこし別そう

七箇之大変



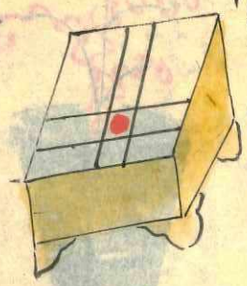
柳子口を置き花生之大事



夏



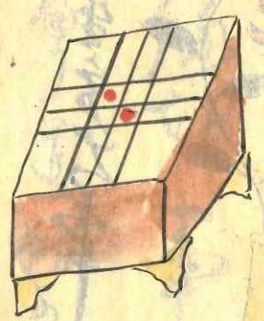
春一色生方大事



秋雨或ハ大雨之夜々ニ生花を持

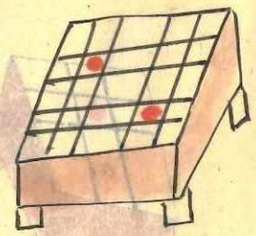
冬

水草園物件木生合之支









魚道之生二万七支



一二尺一束ニテ



一壱尺一束ニテ

一壱尺一束ニテ

五節条之四口傳

一牡丹並菊之類清水ニ而
おれ口ニ作
一束ニテ

一河骨蓮浮葉睡蓮
前日糸ニテくゝり切ナリ
茅花根ヲ焼又湯ニ
一水仙陰陽合ル口傳

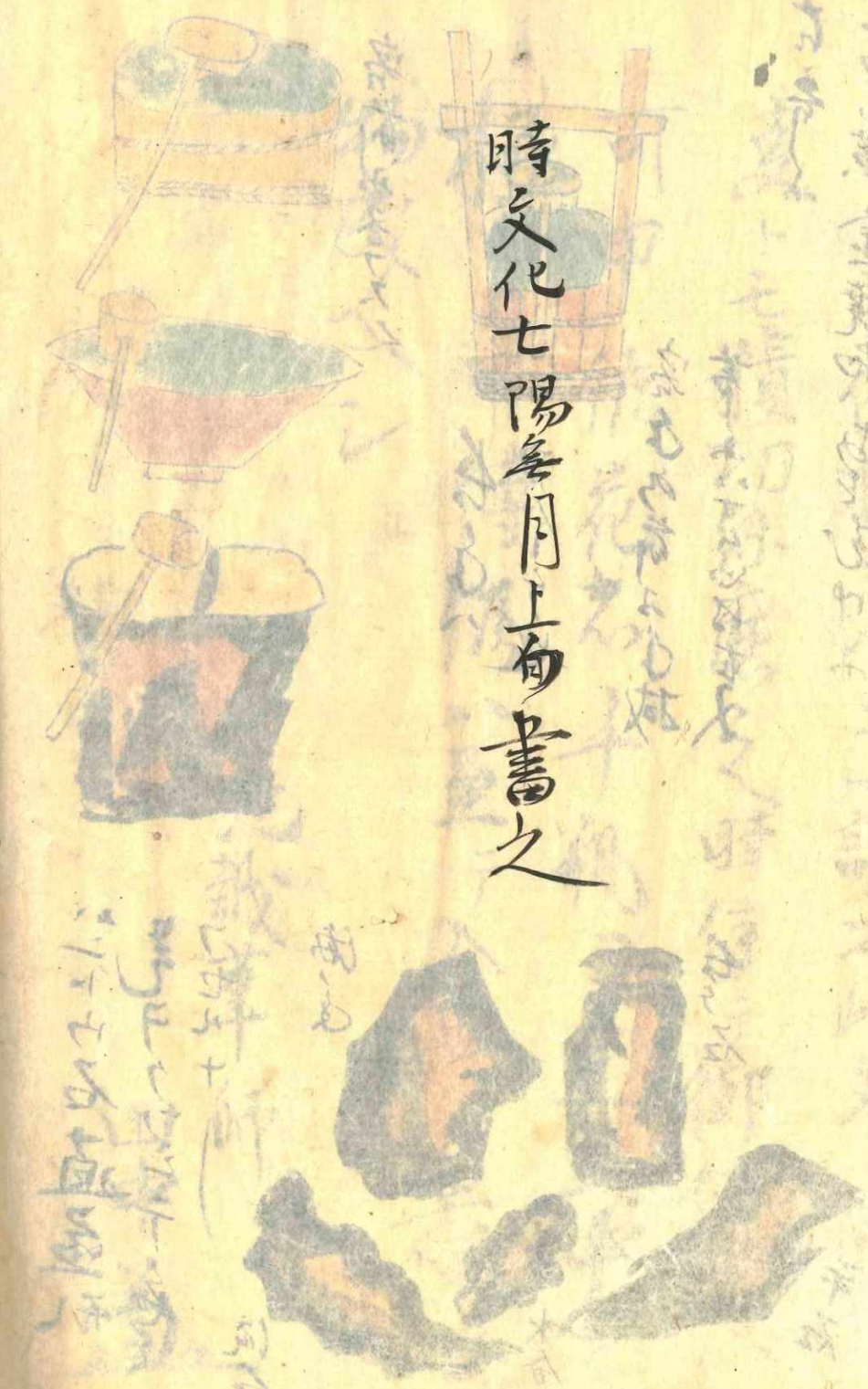
右生花傳授十余之一記之此外家傳
之ト雖モ積功修應之時傳テ御傳ヘ
可申候花ハ千姿ヲ生其本ヲ
極ルト申傳候ハ至テ入窟ク奥深キ
物成ヘシ

北誠華師
田中翁



古キ
石蕗金焼ハをもゆみ
梅ハうつもゆ垂かゝ

時文化七陽春月上旬日書之



客座床間の内陳まさに前在るところの
ごとく唐の青牛の蒔絵の香炉の如き
凡そ行年百歳に垂んとする翁なり
未だ嘗て下客を迎えず而して
今亡セルカ
在十二十サスリヤ

石川縣
第壹大區小八區越中國新川
郡魚津大町百十九番地
阿波加俚造次男
雇　二年齡十七
明治十一年寅五月十二日
書之

Molto Interessante

Spunto dalle

Sue

parti